洋１０－１８

「渇き」　　✿✿✿✿

２０１０（平成２２）年２月２日鑑賞＜東映試写室＞

監督・脚本・プロデューサー：パク・チャヌク
サンヒョン（神父）／ソン・ガンホ
テジュ（ガンウの妻）／キム・オクビン
ガンウ（サンヒョンの幼なじみ）／シン・ハギュン
ラ夫人（韓服店経営者、ガンウの母親）／キム・ヘスク
車椅子の老神父／パク・イヌァン
スンデ（ガンウの麻雀仲間）／ソン・ヨンチャン
ヨンドゥ（ガンウの麻雀仲間）／オ・ダルス
２００９年・韓国、アメリカ映画・１３３分
配給／ファントム・フィルム

＜たしかに新境地だが・・・＞

『オールド・ボーイ』（０３年）を観れば映画好きの人なら誰でも衝撃を受け、パク・チャヌク監督の名前を覚えるはず。また、ＴＶドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』で大人気を得た美人女優イ・ヨンエを起用した『親切なクムジャさん』（０５年）の驚くべき構成力を実感すれば、パク・チャヌク監督の実力にビックリするはず。しかして本作は、そんなパク・チャヌク監督が１０年以上の歳月をかけて準備してきたもので、「“現代の韓国の街に住むバンパイア”というユニークな視点からこの映画の空間は作られた」らしい。しかもパク・チャヌク監督がそんな構想を映画化するについての面白い設定は、神父としての倫理に従い禁欲的な生活を営んでいるサンヒョン（ソン・ガンホ）をバンパイアにしたこと。近時ハリウッド映画では、『トワイライト』シリーズなどのバンパイア映画が花ざかりだが、私はこの手の映画にあまり興味がない。しかし本作は、パク・チャヌク監督・脚本・制作による最新作ということでバンパイア映画と知りつつ鑑賞したが、さてその採点は？

本作は『オールドボーイ』『親切なクムジャさん』と対比すれば、作品としては星３つだが、たしかにパク・チャヌク監督の新境地であり、テジュ役のキム・オクビンというすばらしい収穫があったことを考慮して星４つに。

＜ソン・ガンホの「つかみ」もイマイチ？＞

日本人には意外と知られていないが、韓国はキリスト教徒が多い国。そんな土俵の上に本作の主人公であるサンヒョン神父のキャラが成立するわけだが、本作ではそのキャラが特異中の特異、そして異例中の異例。だって、謹厳実直なカトリックの神父サンヒョンはアフリカで実施しているというワクチンの開発実験で死んでしまうのだから。もっとも、それでは本作のストーリーは成立しないから、サンヒョンはある事情によってイエス・キリストの「復活」と同じように、奇跡の復活を果たすわけだ。

そして、今やサンヒョンは「包帯の聖者」と呼ばれて信者たちに崇められているが、本作でみる限りその信者の数はたかが知れている。これでは、かつての「オウム真理教」や現在の「幸福の科学」の方が上？そんなくだらないことを考える余裕があるくらいだから、韓国を代表する男優であるソン・ガンホの映画冒頭における「つかみ」もイマイチ？

＜何よりもキム・オクビンとその性愛シーンに注目！＞

私が近時食い入るように見つめ感心したのが、本番さながらを思わせる中国映画『ラスト、コーション（色、戒／ＬＵＳＴ，ＣＡＵＴＩＯＮ）』（０７年）と韓国映画『霜花店（サンファジョム）　運命、その愛』（０８年）における性愛シーン。

しかして、パク・チャヌク監督の本作でも注目すべきは、パク・チャヌク監督が本作に抜擢した１９８６年生まれの個性派女優キム・オクビンと、その性愛シーン。キム・オクビン演ずるテジュはラ夫人（キム・ヘスク）のバカ息子ガンウ（シン・ハギュン）の嫁だが、その生い立ちは不幸のオンパレードらしい。そんな設定に対応して映画冒頭のテジュはセリフが全くなく、ラ家において抑圧された奴隷的存在であることを観客に暗示する。ところが、ラ夫人から病弱な息子のために祈ってほしいと依頼されたサンヒョンがラ家を訪れてみると、このガンウはサンヒョンの幼なじみ。これをきっかけにサンヒョンはガンウの家に出入りするようになったわけだが、サンヒョンはなぜかラ夫人やガンウに抑圧されているガンウの妻テジュに興味を示すことに。

このテジュ役を演ずるキム・オクビンは、女優でいえば若い頃の秋吉久美子、歌手でいえば『少女Ａ』当時の中森明菜のイメージがピッタリの美人女優。邦画では優等生的な女優が花ざかりで次々と生まれては消えているが、本作におけるキム・オクビンの存在感は、肉体そのものをぶつけた演技と相まって絶品！『ラスト・コーション』『霜花店（サンファジョム）　運命、その愛』と並ぶ三大性愛シーンとも言えるテジュの、激しくも切ない性愛シーンに注目！

＜バンパイアの定型シーンには少しうんざり＞

近時なぜかバンパイアブームとなり、『トワイライト～初恋～』（０８年）とそれに続く第２弾『トワイライト／トワイライトサーガ』（０９年）が大ヒット。しかし私は、バンパイアが血を吸うシーンや超人間的な能力で跳躍するシーン、そして刺されてもすぐに傷が癒えてなかなか死なないというバンパイアの定型シーンにはいい加減うんざり。バンパイアの究極の敵は太陽。だって太陽の光を浴びればバンパイアは死んでしまうのだから。本作ではラストにそんなシーンが登場するから、しっかりお見逃しないように。

他方、バンパイアが生きていくためには、人間にパンと水が必要なように血が必要。しかして、ある事情で死亡したにもかかわらず奇跡の復活を遂げた神父サンヒョンは、今やバンパイアになって復活していたから大変。さて、神父という表看板で生きているサンヒョンは、どこでそんな必要不可欠な血を入手するの？映画によると、サンヒョンが仕事で赴いている病院で昏睡中の入院患者の血をチューブで吸ったりしてかろうじて手に入れているようだが、それはいつまでキープできるの？ましてや、神父という職業とバンパイアという属性が両立できるのはいつまで？

本作はパク・チャヌク監督作品らしく面白いところもたくさんあるが、人間の生き血を吸うシーンや超能力のシーンを見ていると、バンパイアの定型シーンに少しうんざり。

＜幽霊は水がよく似合う？＞

日本では、怪談噺の『累ケ淵』に登場するお累さんや井戸に投げ込まれた『播州皿屋敷』のお菊さんを見ても、幽霊はなぜか水に縁があるようだが、それは韓国も同じ？サンヒョンとテジュによって殺された（はずの）テジュの夫ガンウが、たびたび幽霊となってサンヒョンとテジュの前に登場するのはいつも「水もしたたるいい男状態」だが、それはなぜ？それは、ガンウがかなづちであることを知っているサンヒョンとテジュによって、真夜中の湖の中へボートから突き落とされたことに恨みを抱いているため？

ラ夫人とガンウによってトコトン虐げられ続けてきたテジュが、神に仕える身のサンヒョンになぜ惹かれたの？逆に、ラ家の中ではいかにも無愛想で無口なテジュに、サンヒョンがなぜ色香を感じとったの？そこらあたりの妙は、あなた自身の目でじっくり味わってほしい。しかし、一方は夫に隠れて、他方は神に背いて背信的な行為に及んでしまった２人が、なぜ異常なほどに燃えあがったの？またこの時点では、テジュはサンヒョンがバンパイアだということを知らないのに、肩口をかまれてうっすらと血がにじみ出てきたことに女の歓びを感じたのはなぜ？それはともかく、こんな形で一度夫を裏切ってしまったテジュは、その後サンヒョンがバンパイアだということがわかってからも縁を切ることができないばかりか、かえって性の歓びにハマっていくことに。そしてその挙げ句、サンヒョンとテジュは共謀してガンウをボートから湖の中へ。

サンヒョンにガンウへの憎しみが生まれたのは、最近やけに艶かしくなったテジュの太ももにガンウによる虐待の傷がついていることを発見したため。しかし、そんな一方的な動機によって殺されてしまったら、ガンウはたまったものではない。したがって、ガンウが再三「うらめしやー」という形で登場し、サンヒョンとテジュの間に割って入るのももっともだが、意外にそんなシーンがコメディ風につくられていることに注目。それにしても、幽霊にはやっぱり水がよく似合う？

＜禁断の恋の行く末は？＞

映画後半は、前半地味だったテジュの服装ががぜん洗練されたものになるうえ、その色香も格段に増してくるからそれに注目！そうなったのはサンヒョンとの禁断の恋の成果であることは明らかだが、実はある事情によってテジュもバンパイアに変身してしまうから、さてお立ち会い！もっとも、それによって後半のストーリーがマンガっぽくなってくるのは私には少し不満。また映画後半は、息子を殺されたうえ、身体を動かせず、口もきけない状態となってテジュからの虐待（？）に苦しめられるラ夫人の「静かな熱演」がある重要な役を果たすから、それにも注目したい。

しかして、今やバンパイアとして生きていくために人間の血を不可欠とする２人の禁断の恋の行く末は？キリスト教では自殺は禁じられているはずだが、神父でありながら人妻との恋に陥ったうえ、殺人罪まで犯したサンヒョンは、既に神父の道を外れていることは明らか。そんなサンヒョン神父なら、さらに神の教えに背いて自殺することもオーケー？あっと驚く結末を味わうについては、それくらいのヒントは与えてもいいのでは？

２０１０（平成２２）年２月３日記